

ペリル マガジン

第8号：なぜ人々はこんなにも不親切なのだろう？

ピュ〜びる

インタビュアー：オーウェン ルオン

翻訳：原田大輔、アリックス ホルンガシェール、松元美樹

Q、「セルフポートレートシリーズ」における、変容の要素に深い感銘を受けました。あのシリーズが生まれた経緯についてお話いただけますか？

A、セルフポートレートシリーズは、芸術家として、何らかの美術作品を創るという考えが先にあったのではなく、自らの極私的な生活が先に存在した上で、結果産まれてしまった、もしくは自らそのものを創り出してしまったという、私という人間の人生のある時期に於ける断片かと考えております。当時の私にとってそれは創り出そうとして創ったものではなく、生活上に於ける命を懸けた肉体表現の先に副産物として産まれた物でありました。それはまるで病室で死の時を待つチュリエが自ら、静かに最期のドレスを紡ぐ様にハサミで皮膚を切り刻み、糸で皮膚を縫い合わせ、アイロンをかける様にレーザーで皺を伸ばし、この世界の先に存在するかもしれない世界への旅路の準備をするかの様にです。更に言うと生と死の境界線で彷徨っていた私の愛の遺書でもあったかもしれません。そういったギリギリの精神状態であるという前提の上に、ひるがえって生の証でもある、作品という美のベールを纏わせたセルフポートレートシリーズという物を私は現したのです。死を見つめる事で私の魂が生を奮い立たせたのです。

Q、あなたの作品は身体あるいは感情的な側面における、本質的な意味での暴力について提起しているように思います。このことについて、もう少し詳しくお話いただけますか？

A、自らの肉体及びジェンダーを含めた意識に対して、闇で世界が埋め尽くされる程の憎悪を持っていました。そして私は自らの内に存在する憎悪、怒り、苦しみ、憎しみ、あらゆる人間の負の感情を、計り知れない程の代償と共に、強力なカードを切り続ける様にして自らに切り続け、最終的にその感情を転換する事に成功し死から生を獲得し私は生まれ変わりを果たしたのです。他者に対する危害を自己に向けたのです。その闇のベールに覆い尽くされた視界の先に何が待ち受けているかという事を只只知りたいが為に。

Q, アーティストとして、あなたは理想の自己像をつくりあげることに強い関心をもっていますね。ご自身の作品における超越の本質についてお話しいただけますか？

A,ナルシシズムです。

Q, 写真に加えて、映像作品も制作していらっしゃるようです。 「Snow White」においてあなたはシェイプシフター（古今東西の神話に登場する、色々な姿に変身する妖怪）に扮していますが、ここにおいて身体、アイデンティティ、そして液体という概念は、どのように重要な役目を果たしているのでしょうか？

A, 私にとって身体は繊細な硝子で出来た壺の様なものです。そして液体は壺に注ぎ入れられた様々な色をした感情であって、アイデンティティは壺に液体を注ぐ意志であります。硝子は熱を加える事で形状を変えますが、私の肉体もドレスを変える様に意志をもってして体内レベル・体外レベルの領域を感情という誰しもが備え持つ様々な熱を幻であるかのごとく現出させ変容させて参りました。ここでこの作品の他の側面を簡単に補足として述べますと、**Snow white**は実際のインスタレーションでは巨大な大鏡に映像が浮かび上がる形で展示されます。それは白雪姫の物語に出て来る「世界で一番美しいのは誰？」という言葉とも密接に繋がっています。更に大鏡のあるダークルームにはスメタナのモルダウと私の心臓音がミックスされた音源が大音量で奏でられています。硝子に映り込む私を観ている他者が鏡によって自己を観ている構造なのです。

Q, 今後に向けて、どのような作品に取り組んでいらっしゃいますか？

A,私は幼い頃より生きる物の生と死に関して大変興味を持っています。

今、制作している作品の一つとして、**SRS (sex Reassignment Surgery)**に関して、より絞り込んだ、そしてより直接的なイメージの作品があります。その内容に関しては現段階で語る事はしませんが、一般的に過激な表現を取る事になるでしょう。また、日々抜け落ちる髪の毛を大量に保存してしまったり、生物の死骸等も収集しています。これらはいずれ強迫神経症という病の中から現れる発作と共に作品として変容する事でしょう。